
ある晴れた日のコト

ユウノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある晴れた日のコト

【Nコード】

N4289F

【作者名】

ユウノ

【あらすじ】

二×××年。人類に能力という力が発見された。能力は様々な場所 で役立ち、学校の科目にスタイルという名で入った。スタイルの科目のみが全然出来ない落ちこぼれである南城涼希は自分の能力に不満を感じ始めた頃、ある少女と出会う。そして他人と出会う事で涼希は成長していく。ファンタジーのアクション物。

第一章「南城涼希」 NO1「プロローグ」

二×××年。人が“能力”を使うようになってきた年。

近年、学者が新しく発見したもので名前は“能力”というもののしかなく、謎が多い『人類の神秘』と発見した学者は言っていた。

能力の力、強さ、また効果などは人それぞれ全く違い同じ『炎』を元にした能力でも炎の癖、特徴など個人個人全く違う。

実に興味深いものである。

能力が世界に馴染んでいく内に都市の所々には能力を使った製品が溢れ、また学校の科目に仲間入りしなくてはならない存在となった人それぞれの能力、言うならば格好がある。だから――

学校の科目では“スタイル”と言う。

公立高ノ木中学校。

県内でも特に小さい市のそのまた中にある、決まって目立たない高ノ木町の真ん中に位置する中学校。

特に有名でもない。ただ近くにある高ノ木南小学校から来る者が大勢いるだけの学校。

キャッチフレーズは『最新教育技術を』であり真正正銘、“能力”を使った授業を真つ先に取りにいったのもこの学校である。

はつきり言えば地味な学校なので誰の目にも止まらず、普通の日々を過ごしていた。

「う……」

ひととき目立つ校庭の一番真ん中で汗をびっしょり掻きながら、隣に呆れ顔で見ている教師と共に彼はなにかを念じているようにただ

体をじっと固くしていた。

少年の名前は南城涼希。ナンジョウスズキ 中学二年生だ。

誰も居なくなつた校庭。ポツンと教師と男子生徒が立っているのはどこか印象的に感じて教室の窓から覗き込んでいる者も中には居る。今日は6時限目にスタイルの授業はしたのはまだいい、しかし『自分の能力が円形に出た者は帰っていい』と言つたのが失敗だったのかもしれない。皆、帰っていくなかで一人だけ出来ていないものが居たのだ。

そう、彼——南城涼希である。

何分これをやり続けていているのだろう。涼希の隣でずっと見守つていた教師、木田は重いため息を吐いた。

その時。ほんの一瞬のことだった。

ポオ、と涼希の周りが光り始めたのである。涼希本人はもちろん、木田はこの時点で喜んでいた。『出来た』とかでの喜びではない、『やっと帰れる』の喜びで、だ。

（もう、少し！）

ギユ、と力を込めたとき。まるで空気の抜けた風船のように光りは一瞬にして消え、また元に戻つたのである。

やっと出来た、と思つたくらいなので光が消えた時は辺りは静まり、どこか虚しさが残つた。

木田はさつきと比べ物にならないほどのため息を吐くとポーン、と涼希の肩に軽く手をのせた。

「南城。後で来い」

「……はい」

涼希にそう告げると木田は後ろを振り返りゆっくり昇降口のほうに戻つていった。

確実に一人になった涼希は歯をギリツと噛締めた。——なんで自分だけこんな思いをしなきゃならないんだ。

実質、涼希は“スタイル”という授業が嫌いだった。どの科目よりも一番。

他の科目は一番と言ってもいいほど、涼希は点が良かった。だけどこのスタイルという科目のせいで踏みとどまっている。

ふと、思い出す。スタイルの初めの授業の説明。

『能力の可能性は無限大にあります。誰でも使え、人のためになつていく事でしょう。そして人類の近代化に進んでいくと思われます』

「……なにも使えないじゃないか」

涼希はボソリと呟くと教室に戻っていった。

NO2「どうでもいいじゃないか」

「涼希すずきいー、お前、また補習かよ。大変だなあ、お前も」

「他はいいのに能力スタイルだけ悪いんだよな、お前。どんまい！ 木田に絞られる！」

「うるせんだよ、てめーら」

他の者は部活に向かっていくというのに涼希だけ、補習室へと向かっていた。

様々なところから声が飛び交う。その一人、目立つ金髪の頭をした小田卓巳オダタクミ、通称オタクは優しく涼希の肩に手をかけた。

寄りかかってくるので、涼希は立ち止まりオタクを睨む。「おーこわい」とオタクは苦笑すると耳元でボソリと囁いた。

「後で付き合ってくれよ。……いい同人誌が見つかったんだ」

「は？ てか、おい！」

涼希はオタクから離れるとオタクの制服の袖を掴み一番近くにあった男子トイレの前に連れ込んだ。

「なにするつもりかしら？ 僕ちゃんはそんな趣味はない。けど、ホモとかボーイズラブとか自分の価値を捨ててまで女子の目を集めたいなら俺はいいけど？ ま、どうせ集められるのは腐女子ふじょしだけだと思っけどな」

意味不な事をいつているオタク。
重いため息を涼希は吐くとわざと優しい口調でいまだにぶつぶつ言っているオタクに呼びかけた。

「あのな、オタクはどこか勘違いしていると思うけど俺はそんな趣味ないから。ホモとかその他いろいろとかそりゃあ女子の目を集められるけど逆に来るのは世間の冷たい視線だ。そこら辺、よく理解しろ」

優しく言った、きつといった。自分的には。

ふと耳を澄ませてみるとどこからかすり声が聞こえてくる。誰かと思ったがこいつしかない。
そう、オタク。

「ひ、酷いや！ 俺——いや僕ちゃんの趣味をそんな風にいうだなんて！ その発言は世界のオタクの人を——」

言いかけたところでストップをかける。これも毎日の日課。

「はい、はい。俺は木田先生のところに行くから。一人でやってろ」
「涼ちゃんの馬鹿！ ドあほ！」

最後の最後までオタクの声が聞こえたが涼希は最初の「お前のほうがバカだ」の一言を最後にオタクに呼びかけることはなかった。
この言葉がオタクに聞こえたかは涼希は知らない。聞こえても聞こえてなくとも自分には関係ない事だから。そう重いながら涼希は補習室へと再び足を運んだ。

「失礼します」

こんこん、とノックを二回繰り返し引き戸式のドアを開ける。

補習室は意外にも広くできており、最新のホログラム機能もついており、すぐに立体映像など映すことが出来る。

能力なども使うので換気はよく、日当たりもばつぐん。端っこの方

に机を置き、棚の下にある収納スペースには小さくなれるパイプ椅子を完備。補習室としては充分なぐらいだった。

それとは裏腹に「こんなのに金かけるなら違う事に回せよ」と思う生徒がいることはいる。基本的には『補習』として使うので生徒達には良く思われていなかった。

入ると木田が太陽の光を背中に浴び、真ん中で立っていた。

涼希はそのまま前に進むと木田の近くに行き、少し前のほうで立ち止まる。

しばらくの沈黙が続いた。

「南城……。来たのか。待ってたぞ、今日は、な……」

若干、皺しわが入っている顔をにんまり笑顔にさせると縦長の机を出し、手をかけた。

本名、木田康祐きたこうすけ今年、50になる結婚済みだ。

教師になってから20年する大ベテラン。しかし生徒からの評判はあまり良くはなくむしろ嫌われている、と言った方がいいのかもしれない。

『差別』する疑いがあるのだ。裏では成績の悪い生徒の悪口を言っているという。涼希自信、そう感じていた。

話は戻る。木田は更に椅子を出すと座った。涼希が座る椅子も出されゆつくりと座る。

「でな。せっかく、二人きりになった事だし話したかったんだ」

「はあ……。で、なんですか？」

木田は足を組むと涼希の顔を見つめた。

「もっと努力したらどうだろうか？」

「努力……ですか」

涼希が言うと、木田は頷く。

それがなんだってんだよ、貴様には関係ないだろ。

落ち着いた顔でいながらもイラつきを感じていた涼希はズボンをギョツと握った。

「南城は他の成績はいいんだし、スタイル能力の方も努力すればきつとよくなると思うんだ。だから……」

「……」

黙って木田の長い話を聞いていた。

木田の話す全ての言葉が、ムカついてウザくて全部理屈に聞こえる。

『お前は出来る』『大丈夫だ』その言葉が偽りの言葉に聞こえて歯を強く噛締めた。もう、どうでもいいから早く終わってくれ。

「——だから、だ。頑張れ、南城。先生も頑張るから」

嘘だ。

そう言いながら微笑んだ木田の顔をぶん殴りたくなった。気持ちを丸く押さえ込ませ代わりに拳を強く握り締めた。

「これで終わりだ。ごめんな、待たせちゃって。南城は部活なんだっただけ？ たしか……」

「吹奏楽です。チューバをやっているんですよ」

涼希は立ち上がり出口へと向かっていく。

「そ、そうか！ 頑張れよ、応援してるからな！」

最後に聞こえた木田の声に反応せず補習室を出る。

涼希の心の中にはグログロドス黒いものが渦巻いていた……

NO3「あなたは誰ですか」

「今日も疲れたなあ……」

部活も終わり今帰宅中の涼希は重いため息を吐く。

もちろん、一人で帰っておりセミが大合唱している中を通っていく。夏独特の蒸し暑さが襲い掛かりシャツを仰ぐ。

なにも考えずに歩いていたらいつの間にか付いていたらしい。マンションのエレベーターのところまでだるそうに歩きボタンを押した。チン、という音ともにエレベーターのドアが開くと涼希は中に入り、3階のボタンを押す。今日は一度も止まらず3階に着くことが出来た。

よろよろと歩いていく、一番端っこにあるドアを見つけるとポケットから鍵を取り出しガチャ、と鍵を一回ひねると鍵が開く。そしてドアを開いた。

意外と綺麗に片付いているリビングがすぐ目に入る。小まめに掃除をしているのだ。

「ただいま」とは言わない。絶対に言わない。ここに住んでいるのは涼希たった一人だからだ。母親、父親、兄妹。いたが、いなくなった。交通事故によって。あの日から「ただいま」とは言わないことにしている。——虚しくなるだけだから。

靴をそこら辺に置くと窓を全開に開いた。ずっと開けていなかったためか熱気が部屋にこもっているのだ。おまけに臭い。

夕飯の買い物の為、机に置いてあった財布を取り再び靴を履く。そして——玄関のドアを開けようとノブを回した。

「ん？」

押しても開かない。おかしいな、ともう一回ひねっても開かないのだ。引いたりもしてみたがそれでも開かない。

ガチャガチャ、という音だけが響き渡り思考をフル回転させても壊した理由が見つからない。

いや壊れたんじゃない。涼希はノブから一旦手を離すと汗まみれになった手をズボンで拭いた。そしてまた強くノブを握り締める。

これは壊れたのでない、ドアの前に『何か』がいるから開かないんだ。

「んッ！」

力強くドアを押すとなにかが吹っ飛んだ感じがして前にあった重い『もの』は居なくなり軽くなった。

一回ドアを閉じ、壊れていないか確認すると優しくいつもみたいに開けた。

が、今度もまた、おかしかった。ないのだ、ドアの前にいた重いものが。ドアの前にいたのなら目の前にはずなんだが……。

「おかしいな……。なかったのかな……」

首を一回傾げるとドアを閉じ鍵を閉める。

辺りを見渡そうと足を動かしたその時。

「痛いじゃないかー！ あたしにこんな事したの、誰ー！？」
「は？」

甲高い、少女の怒声。間違いなく耳にしたその声はぶつぶつ何か言いながら涼希に近づいてくる。

なんでこんなところに人がいるんだ。考えようとするにも時間がな

くその少女に強く肩をつかまれる。

「あんななの？ あたしの大切な睡眠時間を無くしやがって！ この代償は一万円、いや、五十万円だー！！」

「と、とりあえず謝るから！ 落ち着けよ！」

綺麗な白い長い髪に、赤い瞳。まさに美人というべきなのに彼女は口は何気に少し悪く、言っていることも意味不明。

涼希はため息を吐くと、彼女を押さえ込むために優しく訴えた。

「ごめん。あなたがいる事、気づかなくて……。家に招待しますから……」

「なにかくれないの？ お菓子とか」

「も、もちろん！」

「よっしゃ！ 行こう、行こう！」

少女の耳がピクリと動くとその大きい瞳を輝かせ、涼希の手をギュッと掴んだ。

さっきまでの姿が嘘みたいどこかお行儀よくなっている少女に戸惑いながらもポケットから鍵を取り出しドアを開けた。

「おじゃましてーす！」

人の家だというのに少女は靴を履き捨て、ずかずかと部屋の中に入る。

涼希は大きなため息を吐くと少女の靴を丁寧に並び替えてからリビングへと向かった。

NO4「イメージ大崩れだよな」

目の前にある空になった皿。元は皿の上にあったポテトチップス、のり塩味を一瞬にしてたいらげた少女は前よりかは膨らんだ腹を二回軽く叩いていた。

ありえない、というか信じられない。

ポテトチップスは先程出したばかりだったのに、出した瞬間、少女は皿ごと持ち上げて口を大きく開けるとポテトチップスを口の中に流し込んだのだ。

バリバリと頬を大きく膨らませ食べる少女の姿は怪物までとはいかないがかなり『引く』ものだった……。

驚きが隠せない涼希は皿をひっくり返したりしたがポテトチップスの残骸等全く見当たらない。

可愛らしい外見をしているのに中身はあれなんだな……と涼希は感じると肩をすぼめて少女を横目でみた。

「あゝ、美味しかった。もうないの？」

「あ、ああ。もうないよ」

そう言う少女は残念そうに、

「えゝ、あたしあの味気に入っただのに」

口を尖らせて言った。

涼希は少女を見つめながら皿を片付けようと立ち上がる。

「また今度買ってあげるから。な？」

「むう。分かったよおう」

それでも納得がいかない様子。

皿を台所にそのまま置くと涼希はベットのの上にポヨンと座った。

「ま、いいや。お菓子を食べさせてくれたから、ね。あたしはハレ。
『晴れる』て書いてハレ、だよ」

先程とは一変して少女——いやハレの機嫌はかなりよくなったらしい。微笑みながら自己紹介をしている。

とりあえず一件落着、と安堵の息を吐くと頬を軽く搔いた。

「俺は南城涼希。宜しくな、ハレ。んで、なんでお前はあそこに居たんだ？」

「それはね……」

腕を組みながらハレは深刻そうに頷いた。

「迷子になっちゃったんだよね」

「は」

意外、というかあつさりとした理由に思わず聞き返す。

「だから」とハレは笑いながら涼希の肩を叩いた。

「迷子だつてば。命令を受けてたのに迷子になっちゃったの。それで、お腹が空いたし眠くもなったから適当に、睡眠をとろうと思って。で寝たところがあんた、南城の家だったって事だばさ」

「どんだけだよ……。ていうかなんで俺の家……」

不幸ともいえるこのハレという少女の出会いに、涼希は肩を落とすとまた大きなため息を吐いた。

ハレが自分の家の前で寝なければ。今こうしている時間は買い物し

ている時間にだったはずなのに。
ハレも同じようにベットに座ると涼希の隣に行った。

「あたしもね、好きでやっているんじゃないんだよ？ 分かるかな？」

「わからねー。ていうか分かりたくも無い」
「分かってよぉー君達『人間』にも大事なとこなんだからばさ」

『人間』？ 涼希は驚いてハレを見る。
ハレはあいかわらずの笑顔のままだ。

「どういう事だよ。お前も人間だろ？」
「違うよ。私『天使』だもん」

時が一瞬だけ止まった。
こいつ今なんて言った？ 天使？ 天使って言ったよな？

「嘔吐してるだろ、ハレさんよ。お前嘔吐してるだろ」
「嘘じゃないよ。あたしは本当の事しか言わない」

胸を張ってそういうハレ。
天使といえば羽もついていて、それで頭の上にわっかがある人間み
たいなものだよな？
今まで頭にあつた天使とは随分イメージがちがく、涼希は思わず苦
笑した。

「……天使、なの、か？」
「そうだよ、天使だよ。凄いでしょ、偉いでしょ、サイン欲しいっ
しょ？ しょうがないから南城にだけあげちゃおうかな、どうしよ
うかな」

「折角の天使様も台無しだな」

威張り続けるハレに涼希はため息を吐くと、壁に寄りかかった。
様々なことが頭に入って頭痛がする。

「天使の仕事、知りたくない？」
「仕事？」

自信満々の瞳で言ったハレの後ろには大きな翼が見えたのは……き
つと錯覚だ。

涼希は軽い気持ちで頷いた。

NO5「ごめんなさい、意味分らないです」

「――仕事？」

「そう、仕事」

そう頷くハレの瞳は吸い込まれそうなくらい綺麗だった。

天使の仕事というのは聞いてからすぐ興味が湧いた。が、出会ってばかりの彼女の性格からだすると嘘かふざけて言うかどちらかの可能性が高い。

涼希自信、騙されるのは嫌な方で、しかもハレに騙されるときたら絶対嫌だ。でも聞いてみる価値はある。

ふざけ半分で涼希は頷いた。

「天使の仕事というのはね、そうアレ……『元に戻す』の」

「元に戻す？　どういう事だよ」

ハレは突然立ち上がると、勝手に涼希愛用机の一番上の引き出しを開ける。

「あつ」と言っている時はもう遅く。ハレはそこからメモ用紙を取り出すと鉛筆立てからシャープペンシルを取った。

そして、またベツトに座る。

「簡単に言つとね、リサイクルだよ」

「意味わからねーよ」

うーん、とハレは考え込むとメモ用紙にシャープペンシルで薄く書き始める。

「なに書いてんだ？」

「馬鹿な南城が分かるための図」

「お前、殴れてえのか？」

握りこぶしを作って涼希が脅してもハレは動ぜず、シャープペンシルを動かす。

つまらないな、と涼希はため息を吐くとハレが書いている絵をただ見ていた。

「出来た！」

約一分程で出来た絵は正直言っ て下手でなにが描いてあるのか、どうなっているのか全く分からない。

おまけに今までみた事がない、変な文字まである。

これはこう書いてあるなと分かるのは、中央にある『ハート』の形をしたものだけ。

いくら目を細めたり凝らしても全然分からない。

「これ、なんだよ」

「分からないの？ 本当に南城って馬鹿なんだね」

殴ろうと思ったが怒りを拳の中に丸く収めるとハレが書いたメモを見ながら聞いた。

「本当で分からないんだよ。お前の字が汚すぎてな。丁寧に、この図の意味を教えろ」

とんとん、とメモを指差す。

ハレは一回考え込むとメモを手を取った。

「これはね、あたし達天使と『悪魔』と人間の関係を現した物だよ」

「関係？ そんなものねえよ」
「それがあるんだって」

物分りが悪い涼希に説得させるように言いかけるハレ。
涼希はもう一度メモをよく見た。

右上にあるものは、ハレがいう天使だろう。その反対側にいる雑に黒く塗りつぶした人間なようなもの……悪魔だろうか。

天使と悪魔の真ん中にあるのが唯一なんて書いてあるか分かる『ハート』。矢印が天使に向かって一つと悪魔に向かって一つある。どこか、この二人が戦っているようにも見えた。

この戦いを遠くから見ているもの……右下にいる『人間』。これはどういう意味だろうか。

「俺にはその、天使と悪魔が戦っているように見えて人間が見ているように見えるのだが……違うのか？」

「ブブー。全然違う。すごい違う。ホントに南城って馬鹿だよね」

「お前って本当、一言多いよな」

もう怒り爆発寸前だった。今まで何回、ハレに『馬鹿』と言われたのだろう。

今こうして拳を握り締めて怒りを押さえ込んでいるのにも限界が来ていた。

「うん。よく言われるよ。次説明するねー」

あっけらなく、ハレにそう言われ思わず力が抜けてしまう。
口を大きく開けて、途方にくれている涼希の事はほっといて、ハレは左上にいる天使を指差した。

「戦いじゃないよ。天使と悪魔は『奪い合ってる』の」

「同じじゃないのか？」

「違うから言ってるんじゃない」

どこか雰囲気が変わったハレ。涼希はどこか怖くなって肩を震わせる。

そんな涼希は気にしていない、というか見ていないハレは次に悪魔と天使を交互に指差す。

「天使と悪魔は正反対のようなものだから、能力も違^{ちから}うわけよ。それにちよつと対立していて、で、その真ん中に位置するのが……」

ハレは右下にいる人間を指差した。

「人間って事だばさ」

「……そうなのか……でもあまり信じられないな」

涼希は腕を組み、メモを見る。

この図を見ただけではハレが言っていることがよく分からないような気がするの^{ハレ}は気のせいではない。

「だからね、人間はどちらも属してないから、人間の心^{ハート}はあたし達に狙われているんだよ」

「は？ 狙ってるって……俺達を？」

ありえない事を真面目な顔で説明されては「嘘だ」と簡単に言えないものである。

半分混乱状態の涼希は思わず聞きかえした。

ハレはゆっくり頷いた。

「そう。だから真ん中にあるのが人間の心……って事だよ。分かった？」

「ああ。よく分からないが……な」

涼希も頷くと今までの説明を整理した。

まず、天使と悪魔は対立していて、その真ん中にいるのが人間。天使と悪魔は人間の心を狙っている……。

「なんでだよ？　なんで天使と悪魔は人間の心は狙う必要があるんだ？」

「それはね——」

ハレは今まで見たことのない、真面目な顔で説明し始めた。

NO6「これは夢ですか？」

ハレが来て約10分程度。部屋は恐ろしい程静まっていた。

「それはね——」

ハレはゆっきりと口を開く。どこか緊張感が漂っていて涼希は唾を飲み込んだ。

その時だった。まるで、ハレの説明を邪魔するかのように雑音が入る。

ドンツ、ドンツ——

家のドアが壊れるかと思うぐらい、部屋に鈍い音が響き渡る。

誰かが叩いているのだろうか。いや、人が叩かなければこんな音は出ない。

予想もしない出来事に涼希は戸惑うばかりだった。

「な、なんだ？ どうしたんだよう」

「もう来たんだ……。南城、来て」

焦るばかりの涼希とは対照的に驚くほど、ハレは冷静だった。

手首をハレに掴まれ、涼希はただハレに引っ張られていく。ハレが行った場所は……

ベランダだった。

「ここから飛び降りるよ」

「ちょ！？ なんてだよ！ ここ、3階だぞ！？ それにドアを叩いてる奴らは誰なんだよ！」

「いいから来てよ」

思わず黙り込む涼希。たまになるハレの冷たく、重い声は背筋を凍らせる。

とりあえず、ここはハレに任せるしかないようだ。

どうしてこうなったのかと、自分の運を呪うと舌打ちを打った。

バキッ！

ドアが壊れる音。見なくても分かる。

決心がついたのか、ハレはベランダの柵に足を乗つけると涼希を掴んでいる手を強く握り締めた。

「南城、行くよ！」

「おお！」

理由が分からなくとも、危ない事態に陥っている事は涼希にも分かる。ハレの表情自体は落ちていてはいるが焦っているのは確実だった。

涼希も決心をつき、飛ぶと決め拳を握り締める。

いつも見ているここからの地面。3階と言っても案外高いのだ。

怖い、と言って踏み出さなければなにもならない。目をギュッと瞑った。

「1、2の……3！」

浮く浮遊感。そして耳から聞こえる風の音。

怖かった。だからずっと目を瞑っていた。

ハレに身を委ね、体を固くする。いつ地面に着くのだろうと、待ち遠しかった。

「南城、目、開けていいよ」

ハレの声で涼希はゆっくりと瞼を開ける。

そこは天国でも地獄でもなく、ちゃんとした地上だった。

涼希は安堵のため息を吐くとハレを見る。服に付いた砂埃を一生懸命払っていた。

……どうやって着地したのだろう。涼希の頭の中には疑問が渦巻いていた。

「どうやって、着地したんだ？」

そう聞くとハレは悪戯っぽく笑った。

「内緒だよ、南城」

なんとも彼女らしい答え方でなぜか安心した。

ふと、上を見るとドアをこじ開けたらしい男達が数名見えた。なにが相談している。

彼らがここに着くのも時間の問題だろう。一刻も早くここを動かなければいけない。

そう思った涼希はハレの肩を叩いた。

「ハレ。もう行かないと……」

「分かってる。さ、行こうか」

ハレは走り出す。それに付いて行くかのように涼希も走り出した。走っている途中、涼希はハレの隣にいつて、話しかけた。

「なあ、ハレ。お前、もしかして狙われてるのか？」

一瞬、ハレの顔が沈んだようにも見えたがどうやら錯覚だったらしい。

ハレは真剣な顔のまま、こう答えた。

「うん、狙われてるよ。いや、狙われているというのはアレだな……。ちよつと違う。その……そう、戦ってるの」

「戦ってる？　なんか変じゃねーか？」

違うよ、とハレは首を横に二回振った。

「あちらは悪魔のいわゆる管理人。あたしは一応天使だからあちらも敵意識、というわけよ。それに、あたしも元はああいふ理由で来たし。分かる？」

「いいや、わからねー。つーか、お前説明下手」

「なにを！？」

さすがのハレも思わず振り返り激怒する。

涼希はクス、と笑うとさっきのハレっぽく微笑んだ。まるで悪戯を企む悪魔みたいに。

「ま、お前がどういう理由かは知らねえが、この楽しそうな鬼ごっこに付き合っただけでもいいぜ」

少しの間が開く。ハレがため息を漏らしながら口を開いた。

「……全く、いじっぱりだなあ、南城は。そしてその台詞もベタすぎ」

涼希の顔が真っ赤に染まっていく。

恥ずかしくて思わず赤くなってしまったのだ。

「う、うるせーな！　そういう事は作者に言えー！」
「そういう事も口出しちゃいけないんじゃない？」

そんな事を喋りながらも、涼希とハレは走り続けていたのである。
この時、午後6時。夕焼けが綺麗に光っていた――

NO7「ただいま休憩中」

鳥川という川が流れる上に建っている橋の下の影に二人はうずくまっていた。

夏とはいってもさすがにもう暗い。闇という怖さといつ敵が来るかわからない状態に涼希とハレは動けない状態でした。代わりに警戒という視線を張り詰めていたため、少しだけの風の音、足音だけでも反応して始末。そしてなによりも精神が疲れた。

今まで走り続けていたため足も痛く、そして重い。ハレも限界のようだ。

喋る元気も全くと言っていいほどないので二人の周りには重い空気が漂っていた。

「はあ……」

何回吐いてのだろう、このため息。

いつの間にかこんな事につき合わされている事、そしてそれを了解してしまった自分を呪った。

今日だっていつもどおりに登校して能力の授業では失敗して……。いつもどおりだった。

なのになんで。全てはこの女のせいだ……といってはお終いだろうと涼希はまたため息を吐く。

『あの女のせいだ』という悪魔という自分に『自分もいけないんだ』^{ハレ}と言い聞かせた。

「——ねえ、南城」

「ん？」

今まで黙っていたハレが口を開く。

涼希は驚きハレを見る。どこか重い表情だった。

「あのさ、えつと……」

「なんだよ。今頃になって『ごめんね』とか言うんじゃないぞ。お前らしくないし、キモイ」

「違う！ てか南城、失礼だばさ！」

さっきまでの五月蠅さが嘘のように静かになる。怒っていたハレの顔も段々、暗くなっていく。

「南城は大丈夫かなあ、て」

「は？ どういう意味だ？」

意味が分からなく涼希は聞き返す。

ハレは一回息を大きく吸い込んだ。

「ほら、その？ 戸締りとか、買い物とか」

なんでこいつはこういう事気にするのだろう。

涼希は呆れ、心配そうにしているハレの顔を見て、優しく微笑んだ。

「大丈夫だって。今、気にすることじゃねーだろ？」

「……うん。そだね」

ゆっくり頷くハレを見て、どこかおかしいな、と涼希はハレの顔を除きこむ。

頬はどこか赤くリンゴのようになっていて、目はどこかボツーとしている。

涼希は首を傾げるとハレの目の前で手を大きく二回振った。

「お前、どこか変だな……。もしかして、風邪？」

そう聞くとハレは首を横に振った。

「違うよ。確かに体調は悪いけど、ちよつと能力ちからを使いすぎただけ。人間界こゝに来るには凄い力を使うんだ。頭が故障しちゃっただけだよ。すぐ、直るよ」

『すぐ直る』と言っても、ハレは荒く呼吸を繰り返していて苦しそうだった。

それにハレの事だからあまり信用ならない。

「お前の言う事だなんてあまり信用できないんだよ。辛そうなら俺が……」

「だーから！　だいじょーぶだつてばさ！」

涼希の言葉を遮るかのように、意外にもハレは大きく、強い声で言った。

思わず涼希も驚き、目を丸くする。

赤くなつた頬を更に赤くしながら、ハレはにんまり笑った。

「南城が守ってくれるから、平気だもん」

言葉が出なかった。

「へへ」と笑いながら涼希の顔をみるハレ。どこか頭がおかしくなつた気もする。いや、元からおかしい。なんでだ、なんでこいつは――

涼希は齒を噛締め、拳を握り締めた。

「今日会ったばかりの奴をそんなに信用してもいいのか？　もしか

したら俺は敵のスパイかもしれないぜ？ そうじゃなくとも俺はお前を見捨てるかもしれない。いいのか、そんな事言つてよ。そんなものは余計な油断と隙を与えるだけだぞ」

目を真ん丸くして聞いていたハレはふっ、と微笑んだ。それはとても優しく、軽やかで。

「あたし、南城のこと信じてるもん。逆を言えば、今日会ったばかりの奴にここまで付き合ってくれてるじゃん。だから、だいじーぶあたしの丈夫な保証つき」

「……その保証が一番不安だ……」

ブイサインをしながら、笑っているハレを見て、涼希は呆れる。しばらくしてから、涼希は目を細めて小さく呟いた。

「馬鹿だな、お前。俺はそういう人間じゃねーのに」

寝ているハレの頭を優しく撫でて、「本当にいい迷惑だよ、お前は」と呟き、そして立ち上がる。

少し外の様子を見ようと歩いた。その時。はつきりと見えた。

ゆっくりとこちらに近づく『悪魔の管理人』が……。

NO8「揺れる自分の心」

すぐ近くには草原を探す、悪魔の管理人。

チラッと、その姿を確認すると涼希は隠れた。

心臓が、高鳴って五月蠅い。元から暑いためか、もっと汗が噴出す。

（なんでこんな時につ……！）

隣にはぐったりと寝ているハレの姿が目映る。なんとタイミン
グ悪すぎて、歯を噛締めた。

このままここにじっとしていたらいつかは見つかる。

移動しようとしても歩いている音が聞こえないぐらいに慎重に進ま
なければいけないし、そもそもハレが動けない状態。

今ここを動けない悔しさと、危機的状态に涼希は汗まみれの拳を握
り締めた。

『南城が守ってくれるもん』

そんなハレの疑っていない純粹な笑顔と透き通る綺麗な声が頭に響
き渡る。

——ハレヲ置イテイケバイインジャナイカ？ ソウスレバ俺ハ逃ゲ
ラレル……。

ハレの声と共に悪魔の囁きが涼希を惑わす。思わずクラリとふらつ
いて壁に寄りかかった。

このまま、ここに入たら殺される。相手は夢だと信じたい、悪魔の
管理人だ。殺されるのは間違いない。

怖さと不安、自分を惑わす悪魔の囁き、そうやって生まれる数多く
の黒く、塗りつぶしたような心。

そんな自分は嫌だった。ハレを置いていつて自分だけ助かるうとす

る自分が。

弱くて、他人を守る事でも出来ない自分を信じてくれているハレに精一杯尽くしてやろうと思っっている自分もまたいるのに。寒くも無いのに、体ががくがく震える。

「くそッ……！ タイミング悪すぎだ……」

自分の運の無さに思わず笑ってしまう。
こうしている間にも悪魔の管理人は近づいてくる。

「逃げるか？ 俺」

本当に考えてもいないのについ、この言葉が出てしまった。
ハレを見て、こんな自分に苦笑する。

そして。頬をパチン、と思いつきり手のひらで叩きギュー、と頬をつまんだ。

「当たって砕けるだ」

瞳を獲物を狙う鷹のように光らせ、涼希は呟く。
その時だった。ガサッ、と草を掻き分ける音がして向こう側に『そいつら』はいた。

「みいつけた」

ニヤリ、と妖しく黒い仮面を被った『そいつ』は不気味に微笑んだ。
運が良く、一人しか見つかられていない。後の二人は違う所を搜索中だ。

心臓が大きく跳ね上がる。そいつの姿を見た瞬間——背筋が凍りついていた。

「さ、坊ちゃん。その天使サマを渡して貰おうかねえ」

『そいつ』、悪魔の管理人の一人が涼希に近づく。

こんな時、涼希の目の前は真っ白になって、頭がかあ、と熱くなるのを感じた。

怖い、逃げたい、そんな気持ちを握り締めた拳の中に押さえ込んだ。笑いながら近づいてくる悪魔の管理人を睨みつけたまま唾を飲み込んだ。

「断るしかねえだろ、普通」

弱い自分を信じ、涼希は——足を踏み込んだ。

NO9「俺には関係ない……」

（俺って本当、馬鹿だよな）

今、繰り広げようとしている死を左右する戦いに自分入っているという事にいまだに信じられない。そしてこの状況も。

逃げられるなら逃げられるのに逃げていない自分にため息吐く。ななでこうなってしまったのかと、今日一日を思い返しながら、地面に落ちている木の枝を取った。

悪魔の管理人は相変わらず、余裕が見られる。人間には負けなれないと思っているのだろう。

そんな思いをぶち壊してやろうと、涼希は足を踏み込んだ。

「ッ……！ やあああああ！！」

悪魔の管理人目掛けて思いっきり木の枝を振る。

しかし、掠ることもなく悪魔の管理人は簡単に避ける。

「くそ！ うおおおおお！！！」

連続して体を回転し、木の枝を振る。悪魔の管理人はそれさえも簡単に避け、涼希を馬鹿にしたような目で見る。

当たらない、当たらない……。いくら頑張っても、木の枝を空^{くう}を切る。

自分の能力^{ちから}がもっと強かったのならば。相手を傷つけることぐらい出来るはずなのに。

悔しくて、歯を噛締め、更に大きく振る。

「当たれ！ 当たれええええ！！！」

ピッ
.....
。

一瞬、時が止まったような感じがした。

思いが神に伝わったのか、木の枝は悪魔の管理人の仮面を一筋傷つけ、少しだけだが傷がついた。

それには悪魔の管理人も驚いているらしく、動きは全く止まり呆然としていた。

同じく涼希も嬉しさというか驚きが隠せなく、振った状態のまま固まっていた。

「ああ。君も不幸だよねえ……」

突然、悪魔の管理人が笑いながら言う。

なにがおかしいのかと、涼希は反応した。

悪魔の管理人は小さく笑うと、更に高く笑い始めた。

[illegible]

悪魔の管理人の笑い声が響き渡る。

今の状況について来れず、頭が混乱する。『怖い』という気持ちで頭の中がいつぱいでよく回らない。

少しずつだが、悪魔の管理人の笑い声は直に小さくなり始め、自ら被っている仮面を右手で掴んだ。

その時、悪魔の管理人の瞳が一瞬だけ見えた気がした。

「馬鹿だよなえ、君も。こんな奴、置いていけばいいのに……。お陰で君が殺されるはめに……。こんな馬鹿な事、初めてだあ……。」

ピクリ、と涼希の眉が動く。悪魔の管理人の台詞が勘に触った。

涼希はニヤリ、と妖しく笑うと悪魔の管理人を睨みつけた。

「俺は馬鹿だ。確かに馬鹿だよ。でもな、そんな俺を信じてくれた奴がいるんだ!」

「でもそれが。嘘だったらどうするんだい?」

ふと、何かに気づいた気がした。悪魔の管理人は今だ、どこか嬉しそうに微笑んでいる。

涼希は後ろを振り返り、ハレを見た。苦しそうに荒く呼吸をし、静かに寝ている。

『もしあの言葉が嘘だったら?』

その言葉が頭を駆け上がり、思考が止まる。それを見抜いた悪魔の管理人は優しく、涼希に話しかけた。

「今なら、見逃してやってもいいよ? 君だけねえ。もちろん、交換条件はあの天使だけでも」

『死ななくて済む』

悪魔の管理人の言葉がそんな風に聞こえて、思わず耳を塞ぐ。そんな涼希に追い討ちをかけるかのように悪魔の管理人は囁いた。

「あの天使を渡すだけで君は助かる。これほどいい条件はないよね?」

『君には関係ない』

この言葉が最後だった。

悪魔の管理人は変わらず、笑い続けている。

「俺には関係ない……!」

笑いながら涼希は呟いた。その姿は悪魔のようにも見えた。

そして涼希はハレの方ゆっくり歩むと、地面に座り込んだ。

「そうだな、こいつを渡そう」

この後覚えているのはこの自分がいった言葉を後に覚えていない。
気づいたら、涼希は土手にいた――

NO10「後悔」

暗くなった町に――風がなびく。

俺は、一体何をしたんだ？

なんで俺はここにいます？ ハレは、悪魔の管理人は？

記憶がショートしているらしい、さっきまでの出来事が思い出せない。

「俺は、俺は……。ハレを、置いていつてしまったのか？」

思い出した割には、それは残酷で悲しい記憶だった。なんで自分はハレを置いていつてしまったのか。

それは……。死にたくなかったから。

悪魔の管理人に誘惑され、結局自分に負けてしまった。

――なんという事だ。

自分が自分で憎たらしい。

そう思った瞬間、気づけば思いつきり、自分の頬を殴っていた。普通に痛い。が、涼希は歯を噛締めると一気に土手を駆け下りた。

「ハレええええええ！！！」

そう叫びながら土手を駆け下り、さっきの場所へと向かい、走る。腕を思いつきり振り、全速力で走る。早くしないと、ハレが捕まってしまう。

そんな思いから、涼希はもっと早く走った。だが、さすがに疲れてくる。息があがり、段々呼吸が苦しくなってくる。そんなのお構いなしに涼希は走り続けた。

「ハレ！！！」

あの橋が見えてきたのとぴったりに涼希は叫ぶ。
そして。先程、悪魔の管理人と対面したところへと着いた。

「ハレ！？ ハレはいるかッ！？」

「南城！」

懐かしいあの声。

声がした方向に振り返ってみるとそこには草の陰にいたハレがいた。
嬉しくて、まだ捕まっていなかったことが幸いに感じてハレも笑顔でいた。

目に、涙という水が溜まっているのに気づいて、涼希は目を拭くとハレの元へと駆け寄った。

「ハレ！ 俺ッ、俺ッ……！」

また、涙があふれ出てくる。

本当にもう、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。
そんな涼希の頭にやわらかい、手のひらが乗る。
ふと、ハレを見ると優しくハレは笑っていた。

「来てくれて……ありがとう」

「ッ……！」

ありがとう、ハレ。

口には出さないけれども、涼希は顔を俯きながらそう思っていたのだった。

「でさあ、南城？ 正義のヒーローなら、もっと遅く登場するんじゃない？」

「はっ？」

頭を撫でるのをやめ、チツチツチツと舌打ちをしながら人差し指を振るハレ。

急に何を言い出すのかと思えば。涼希の頭にはハテナマークが浮かんでいた。

「だからさ、あたしが悪魔の管理人に見つかったところで南城登場！　かつこよくない？」

「お前なあああ！！！」

やっぱり馬鹿だ、こいつ。

今頃になって、ハレの為にここまでした事が馬鹿馬鹿しく思えてきたのは気のせいだろう。

頭痛がしたような気がして涼希はため息を漏らしながら頭を抑えた。

「あのなら、ハレ？　俺は……」

「みい、っけ」

言いかけの時。重く暗い声が涼希の背中に降り積もった。今、後ろにいるのは間違いない。悪魔の管理人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4289f/>

ある晴れた日のコト

2010年12月18日21時31分発行